
願ってしまった。

失敗成功

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願ってしまった。

【Nコード】

N6898Y

【作者名】

失敗成功

【あらすじ】

いつも道理の日常を満喫していた立花^{たちばな}新^{あらた}だったが、ある日の出来事で何もかもが変わってしまう。

プロローグ

目が覚めると真っ暗な世界に新は一人立っていた。

誰もいない。何も無い。

目が覚めてから何分立ったのだろうか。時間の感覚までこの世界にはない。

そんなとき、目の前に一人の人間が現れる。

布を被っていて顔はわからないが身長は新よりも低く、胸に膨らみがあったので女だと分かった。

そんな少女がにっこりと微笑み言う。

『お兄さん、一人なの？』

新は少女の言葉に答えようとするが言葉が出ない。

『元の世界、みんなのいる世界に戻りたいの？』

言葉が出ない新は頷いて見せる。

『そっか、戻りたいんだよね』

『だったら……を……ないとダメだよ』

少女は被っていた布を取り、そう言った

日常

「……ん、朝か」

カーテンのすき間から朝日の光がこぼれている。

目覚まし時計のアラームで目が覚めるはずだったが、どうやら今日はアラームで目が覚めなかったらしい。

目覚まし時計はすでに9時を回っており、1限目の授業が始まる5分前。

……走っても間に合わないよな。

そう思いはするが無駄と分かっているけどダッシュで学校に向かう。

途中、見慣れた背中が前を歩いている。

「今日も遅刻か？ 沙菜」

「バカね。アタシはマイペースなのよ。学校の時間になんか囚われないわ」

「あーそうですか」

この、我が道を行く女子生徒は谷口 たにくち 沙菜 さな

紅くて長い髪が特徴で胸はかなり大きい。これでもまだ成長は止まってないらしい。身長は新より少し小さいぐらいだった。新とは

幼馴染で家が隣りにある。

「なによ。新だって遅刻じゃない」

「フツ、何を言っている。沙菜に会うために今日は遅刻したんだぞ」

完璧だ。これで沙菜も俺に惚れちゃうな。

「それはどーも」

沙菜は顔色を変えずに言った。

「おいおい。今の言葉が胸にキュンと来なかったのか」

「新さあ、何回そのセリフ使ってるのよ。昨日も同じこと言われたんだけど」

「分かったよ。新しいの考えとくからさ、明日のお楽しみな」

「……まあ、いいけど」

沙菜はそっけなくそう言ったけど横顔が少し笑っているように見えたのは俺の気のせいかな。

「あ、ところでニュース見たか。殺人鬼がまた事件を起こしたんだってな」

「ああ、そのニュースなら見たわよ。確か今回の被害者は8人って言うってたわね。なんでも誕生パーティー

ィで人が集まってるところで拳銃を乱射したとかなんとか」

「そうそう、しかもその事件が起きたのって隣町だったさ」

「え、そうなの。じゃあ、新は気を付けないとね」

「え、なんで？」

「だってアンタ、人に殺されそうな顔してるから」

……人に殺されそうな顔ってどんな顔だよ。しかも、笑いこらえながら言ってるし。

「新しくん」

新が沙菜の言葉にどう返そうか考えていると、いきなり新の後ろに誰かが抱きついた。

「おいつ、抱きつくなくて、花蓮。なんというかその……ない胸を背中に押し付けるのはやめてほしいんだけど……」

この新の背中にボインをヒットさせているのは草津くさつ 花蓮かれん

短い茶髪と、たぶん……おそらく成長期が来なかったと思う胸が特徴。新とは昔からの幼馴染でいつも新をからかっている。

「ほうほう、私の胸が新しくはないと言いましたが小さいだけで胸はしっかりありますよ。なんなら触ってみます？」

そう言って花蓮は背中から離れて新を見つめる。

「じ、じゃあ、お言葉に甘えて」

新は鼻の下を伸ばして花蓮の胸に触ろうとする。

「ってなにやってんのよ！」

「ゴハッ」

沙菜の素晴らしい回し蹴りで新は宙を舞う。

「沙菜……お、俺を殺す気が……」

まさか、殺人鬼って沙菜のことじゃないだろうな。この蹴りは殺人的だ。

「あ、そろそろ行かないとね。花蓮、行くわよ」

「はい」

沙菜と花蓮はその場に死体(?)を残して学校に向かった。

「……待って……くれ……ガク」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6898y/>

願ってしまった。

2011年11月20日20時24分発行